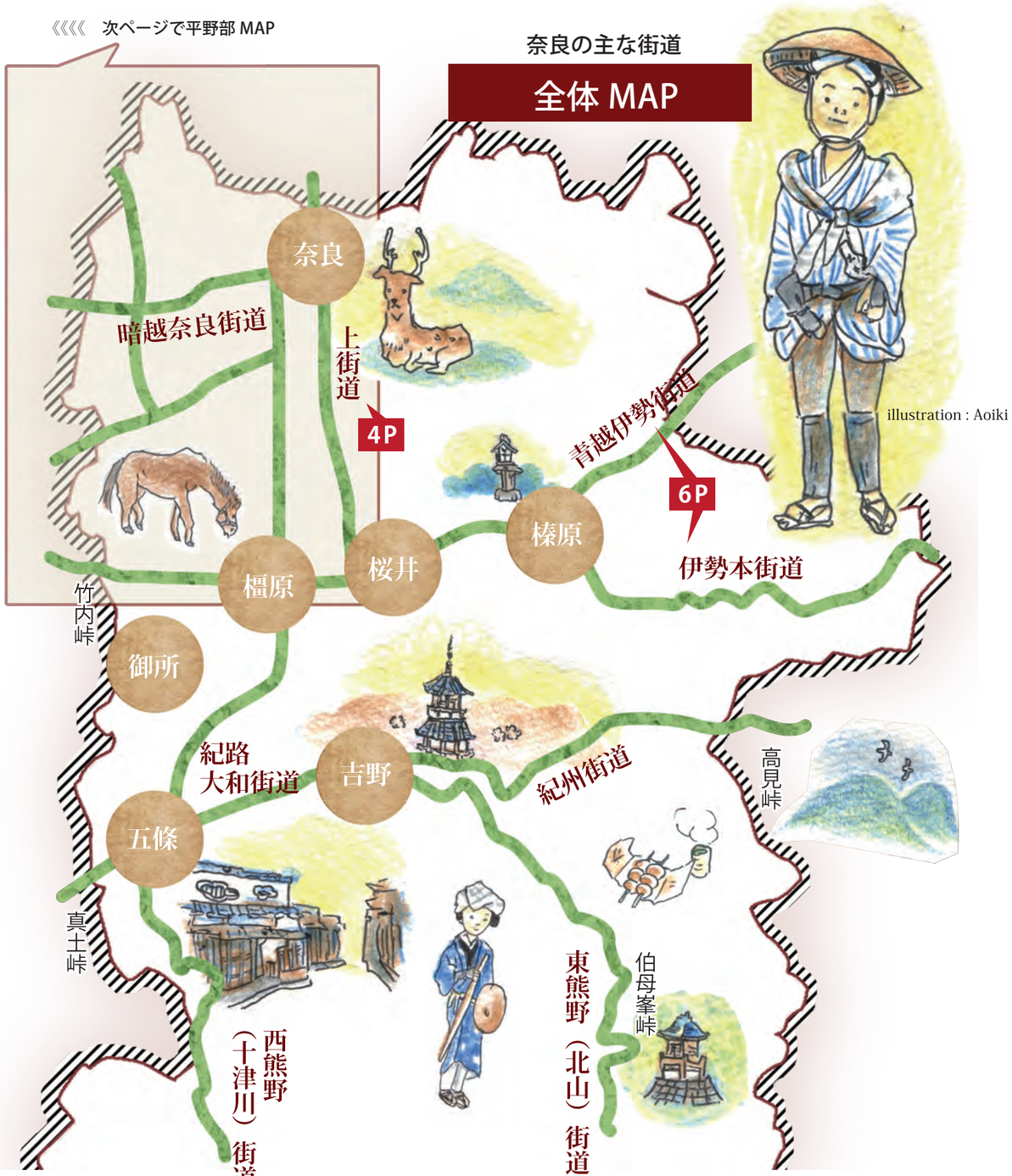


特集　奈良の街道

街のところどころにかつての街道を示す道標や名残りがあるのを目にすることがありますが、それらの道には、どんな物語が眠っているのでしょう。奈良の街道を訪ねてみると、古代からの往来を下敷きに、近世以降は伊勢参りをはじめとした多くの旅人で賑わった形跡に触れることができます。そこに息づく昔の人の営みに、今を豊かに生きるヒントも見つかりそうな気がしませんか。

人形制作：みちやす　撮影：山本茂伸（吉野スタイル）

さとびごころ Vol.28 2017 winter

表紙イラスト / 伊藤 満　　ロゴ / 坂本大祐
取材地 / 天理市

CONTENTS

特集　奈良の街道

04　肘塚はならまちの南玄関　上街道
公益財団法人　元興寺文化財研究所　研究員　服部光真

06　今の景色に重ねて思う日本人の祈りの道　伊勢街道
「やまとびと」編集部　栗野義典

08　街道の交わるところ　八木札の辻

09　橘香る街道の復活を夢見て　「なら橘プロジェクト推進協議会」の挑戦　橘街道

10　市民の手で甦った古道・七曲道　特集連動企画　七曲道あるきレポート

[連載]

12　《地域包括ケアを考える》地域サロン訪問　コミュニティスペース「まんま -manma」

14　《森とともに生きる》十四代目林業家　ドタバタイノベーション奮闘記　第３回　谷 茂則

17　《講から地域自治を考える⑬》近世における村落自治と講・宮座　北井　弘

18　《地域ブランド大国ドイツ》　第４回　「ロマンティック街道」と観光・歴史　柳原伸洋

19　《家族野菜のある食卓》　下北春まなのめはり寿司　協力　三浦雅之＆陽子

22　《奈良の文化と生物多様性　４》　地域でペタキンをまもる　北川 忠生

23　《暮らしの自然療法》　その５　冬の薬膳まんじゅうと冬野菜のスープ　クレメンツかおり

[企画取材]

16　奈良町モノ語り調査
奈良町に伝承されてきた
歴史の証人たち

20　手作り感と人肌感
マルシェに出店してみた。

[コラム]

24　のまはら農園の面白い日々
吉野の会便り

25　醤油小噺
京終かいわい散歩

26　さとび的読書さんぽ
一問一答

27　編集後記
さとびごころ販売・配置スポット

肘塚町の杉本薬局と上街道の賑やかな様子
『大和名処豪商案内記』（明治 17 年刊、杉本由平氏所蔵）より。
杉本薬局は江戸時代から続く老舗であった。

上街道（竹花町）の大灯籠（建立は文政十三年）
「昔この辺りはのどかな田園地帯で竹薮も沢山あった。ある年、この竹に一斉に花が咲いて実がなったので、人々はこれを瑞兆として、竹花町とよぶようになったと伝えられる」「文政十三年といえば、『おかげ参り』『ぬけ参り』と称して、１年間に四百八十六万二千余人の人たちがお伊勢参りをしたと伝えられる年で、このカミカイドウの賑わいぶりと、当時の奈良の人々の信仰の一端を示したものと言えるだろう」（増尾正子著『奈良の昔話　道が紡いだ人々の暮らし編』79 頁（2008 年 6 月 7 日発行、まほろば出版局編／プレーンセンター刊）より）

上街道が奈良の町に入るポイントに位置するのが肘塚（かいのづか）である。肘塚は「ならまちの南玄関」という特性をもって、都市境界にある交通の要衝ならではの活気あふれる個性的な歴史を形作ってきた。その地名は奈良の町に結界を張るように造られた玄昉（げんぼう）（※）の供養塚にちなむといい、その端緒から奈良の境界としての性格が刻印づけられている。遅くとも鎌倉時代には町場が形成され、室町時代にはここで奈良に来た商人たちから営業許可税が徴収されることもあり、上街道を介して人や物資が集まる地となっていた。近くにあった福寺ではこの立地を活かして、舞や傀儡（くぐつ）（人形芝居）などの各種の勧進芸能の興行も行われた。

今なお大切に祀られる 椚神社の神木

この奈良の町の玄関口を守るかのように、椚（くぬぎ）神社の神木が、自動車の往来が激しくなった上街道の路上にあって今なお地元の方々によって大切に祀られている。室町時代、肘塚郷の住民はこの神木を守る役を勤める代わりに領主への諸種の負担が免除されていた。長禄二（１４５８）年に一度その特権が失われたときには、郷として領主に再度それを要求し獲得している。当時の肘塚郷の住民が領主を相手に交渉する政治的な力量と共同性を有していたこと、そして彼らの物心両面のよりどころが上街道に堂々と聳え立つ神木にあったことがうかがえよう。

一方で、都市境界の交通の要衝というその性格ゆえに、土一揆や戦乱に見舞われることもあった。文明十七（１４８５）年には、井上町を経て元興寺南大門辺りに乱入した馬借（ばしゃく）（運送業者）たちによって「貝塚口（かいづかぐち）」の門扉が壊され、方々に火を放たれた。肘塚の人びとにとっては受難だが、反面、上街道は土一揆の道となり、領主が設定した「貝塚口」の門扉が彼らによって破壊されたことは、古代官道たる上津道とは対照的に、上街道が民衆世界に根付いた道となっていったことを示すようにも思われる。

文化の蓄積と発信の拠点であり続けた道

江戸時代にも上街道に沿って町場が拡大し、肘塚の南方に椚（くぬぎ）町、竹花（たけはな）町が成立するなど、この地域はますます栄えた。そして、肘塚が歴史的に有してきたこうした「ならまちの南玄関」という地域の特性こそが、テイチクに代表される近代産業の隆盛の前提となる。

明治三十一（１８９８）年に京終（きょうばて）駅、大正七（１９１８）年には索道がすぐ近くに開設され、物資の集積地としての機能を高めて周辺には蚊帳や材木の工場が集まった。そして昭和十一（１９３６）年に帝国蓄音機（後のテイチク）の本社工場が上街道沿いに開設される。歌手ら著名人もしばしば訪れ、昭和の日本を代表する大衆文化発信の地となったのである。

２０１６年11月、この地に、元興寺文化財研究所の総合文化財センターがオープンした。諸種の文化財の調査、修復、分析を一貫して行う「文化財の総合病院」として、地域文化や人類文化の継承と発展に寄与することをめざすこの施設は、人やモノが行き交い、文化の蓄積と発信の拠点でありつづけたこの地の歴史にふさわしい。上街道は奈良に発する文化創造の道として生き続けているのである。

元興寺文化財研究所　総合文化財センター

※玄昉＝奈良時代の法相宗の僧。俗姓は阿刀氏（安斗氏）。阿刀氏は物部氏と同祖先伝承をもつ古代の豪族といわれる。（編集局）

「ここがやっかい」な街道の名称 時代によって変わります

街道の名前はやっかいである。通る人や時代によって変わるからである。例えば、「京街道」は奈良側の言い方であり、京都人にとっては「奈良街道」である。
「紀路」は５、６世紀から、大和王権があった桜井や飛鳥京とその外港であった「紀伊水門（きのみなと）」（和歌山）を結ぶが、近世になると大和街道などと呼ばれていた。
地図（3 ページ）にある「紀州街道」も、和歌山街道、高見越伊勢街道など７つの名前を持つ。奈良盆地を南北に貫く古代の官道の一つ「下ツ道」は、近世には「中街道」となるからややこしい。

椚神社＝奈良市肘塚町

肘塚（かいのづか）はならまちの南玄関

上街道（前身＝上ツ道）

公益財団法人　元興寺文化財研究所　研究員　服部　光真

上街道と今も路上に立つ椚神社の神木
物心両面のよりどころが上街道に堂々と聳え立つ神木にあったことがうかがえる。
現在の神木は昭和６年（1931）に植え直されたもの。

玄昉を供養した肘塚の跡（中辻町の春日神社付近）。
玄昉の肘（かいな）が埋められたと伝承される。

重層的な歴史が今に息づく道

上街道は、奈良の町と奈良盆地南部とを南北に結び、奈良から長谷寺や伊勢への参詣道としても使われた主要幹線道である。盆地東部の山麓に沿う山辺道や、それを継承してやや西の平地に造られた直線計画道の上津道を前身としており、街道沿いには古代からの重層的な歴史が今に息づいている。

上津道が平城京外京の東端（紀寺町辺り）に接続するのに対し、上街道は奈良の町の中心部に至る。まさしく上街道は平安時代後期以降の奈良の町の形成と不可分の関係で整えられ、奈良の町の歴史とともにあり続けた街道であったということができよう。

今の景色に重ねて思う日本人の祈りの道

「やまとびと」編集部　栗野義典

伊勢街道

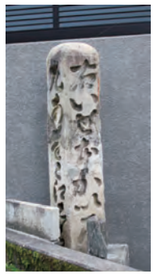
徳川家康の天下統一によって平和な時代が訪れると商工業がいちじるしく発達し、広範な町人層が形成されました。台頭した町人層は、公家や武家にかわって文化の担い手となりました。
伊勢神宮ははじめ民間人の参拝を禁じていましたが、中世以降緩和され、民衆の参宮がさかんになっていきました。大和の街道を往来する人々の中でもっとも多数を占めていたのは、伊勢参宮を志した人々だったと考えられます。このような傾向は江戸時代になっていっそう顕著になりました。（『江戸時代人づくり風土記 29　奈良』農文協発行　より　抜粋）
そんな伊勢街道を長年にわたって取材された「やまとびと」編集部の栗野義典（旧姓小林）さんに、街道の紹介や取材を通じての思いをご寄稿いただきました。

旧街道の風情を残すのは伊勢本街道

奈良からの一般的な伊勢街道のルートはふたつあり、上街道を南下して三輪・初瀬（桜井市）を経て宇陀市の榛原へと東進し、萩原の札の辻で伊勢表街道と伊勢本街道のいずれかをたどる道のりです。
表街道は「あを越え道」とも称され、三重県の名張から青山峠を越えて六軒で参宮道に合流する比較的難所の少ない街道。現在は、国道や近鉄電車の路線が近くに敷かれ、旧街道の趣が急速に失われてきました。
本街道は榛原から伊勢へ向かってほぼ一直線に東に進む最短距離の道ながら、石割峠・山粕峠・鞍取峠（以上奈良県）飼坂峠・櫃坂峠（以上三重県）などの難所をいくつも越えなくてはなりません。難所が多かったせいか開発の着手が遅れたため、結果として旧街道の風情や風習、文化がよく残されているとされています。
自然条件や懐具合を考慮して、少しでも楽で安全な旅を選ぶ人は遠回りでも表街道を歩き、行程を急ぐ事情がある人は本街道を歩いていたようです。
私が歩いたのは本街道です。共栄印刷の社員有志がつくった「やまとびと編集部」の中で、県外出身で大学を卒業間もない私は奈良という土地柄にずぶの素人でした。しかし、読者の方々と同じ目線で見ることができたのかもしれません。

長谷寺に向かう道沿いにある十二柱神社。明治の始めごろまで全村民が年に一度、ここで出雲の先祖を祀って偲んだという。（桜井市）

本居宣長も泊まったという旧旅籠「あぶらや」は榛原にある。近鉄榛原駅からも近い。（宇陀市）


ここが本街道と表街道の分岐点。あぶらやの目の前にある。

伊勢講とおかげ参り

伊勢講は、伊勢参りの費用を村単位の共同出資で積みたて、くじで代表を選んで順番にお参りする。日本各地で組織され、中世から近世にかけてさかんに行われた。
おかげ参りは抜け参りとも言い、講に属さない個人、たとえば奉公人や子などが主人や親に無断で参詣した。大金を持たなくても沿道の施しで遂げることができたという。
伊勢への旅は、信仰はもちろんだが、日常から離れ観光したいという動機も大きく、現代人の心にも通じるところがある。（編集局）

先人の思いを伝える道標やお地蔵さん

桜井から伊勢まで歩くことのべ30回。その過程で、最初はやみくもだった伊勢街道への思いにいろいろと変化が生まれました。桜井市主催の「伊勢街道ウォーク」という二泊三日のウォーキングイベントに参加した時、宇陀市榛原にある巨樹「高井の千本杉（井戸杉）」の根元の鳥居で手を合わせる高齢の女性の姿に強く心を打たれました。大きな大きな井戸杉に対して、ひどく小さく見えるお年寄りの姿は、大いなるものに対する畏敬。大いなるものに託す祈り。何世代にも繰り返されてきたであろう祈りに見え、日本は祈りの国だと初めて意識した瞬間でした。

今と昔を心の中でリンクさせたい

お伊勢参りが流行した江戸時代は、まだまだ旅には危険がつきまとった時代です。街道の路傍には道標があり、常夜灯があります。これらの多くは旅人を正しく導くために街道筋の人々によって施行されたものです。旅に倒れた人の供養のためにお地蔵さんや石碑が設えられ、誰かも知らない人々のために花が手向けられています。
街道筋の道標やお地蔵さまの多くは大切にされていますが、まれに盗難に遭うことがあります。言うまでもなく道標やお地蔵さまはオブジェではありません。道の行き先を示す命綱であり、道に倒れた旅人を慰霊するための施設です。

山粕峠へ続く道（曽爾村）

曽爾村へ向かう途中の道

民家とゆるく蛇行する細い道があるのが伊勢本街道。（宇陀市）

どうか後の世の人々も　今という時代が　先人たちの歩んだ道の続きにあることを忘れませんように。

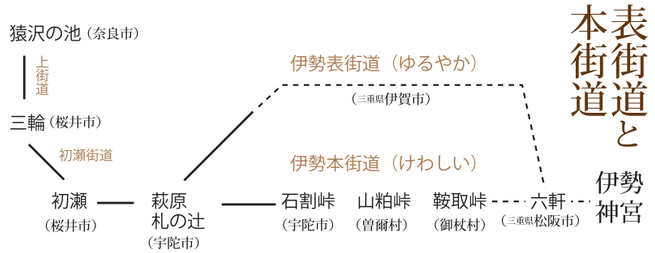
（『伊勢街道を歩く』より）

伊勢街道はもっと「祈りの道」として語られるべきです。
伊勢市に至る道のりにある宮川に江戸時代、橋がなかったのは治安を保つ役割とは別に旅人が禊を「自動的」に行う意味もあったそうです。中には代垢離（だいごり）といって土地の子供が小遣い稼ぎに身代わりで水垢離をしたという史実に触れ、これはこれで合理的だけど…。日本の文化は厳しいようで意外と柔軟であることに気づきました。
折に触れて日本の文化や古人（いにしえびと）が何を大切に思って暮らしてきたかに意識を強くしながら取材を続けました。願わくは、体とともに心も動かし、今の景色に昔の景色を重ねてみる。今、感じた自分の心に古人の心を重ねてみたいものです。想像力がすべてです。今と昔が自分の心の中でうまくリンクできたら、未来に託すべき大切なことがおぼろげながらでも見えてくるのではないかと思っています。

家の軒先に設置された現代の道標。ウオーキングする人を迎えている。（御杖村）

天然記念物「高井の千本杉」は、分かれた幹のひとつひとつが大木で、空を覆う枝の広がりは見えないものをつかみとるかのような霊力をおびている。かつてここにあった井戸の周りに密植された杉の根元がゆ着したもので、推定樹齢は5～600年。今も「千杉白龍大神」として多くの人に信仰されている。

表街道と本街道



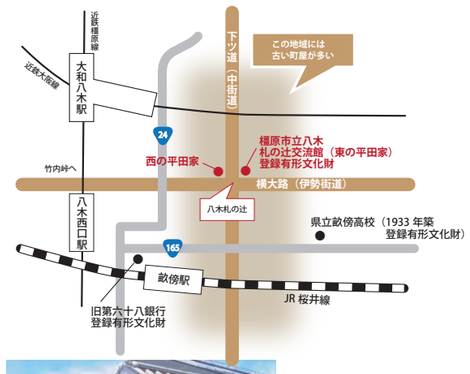
『伊勢街道を歩く』
やまとびと編集部小林義典：著
やまとびと編集部：発行
2011年

桜井市発のフリーペーパー「やまとびと」に30回にわたって連載された「伊勢街道を歩く」が単行本としてまとめられています。
問い合わせは同編集部
TEL 0744-45-3112

街道の交わるところ

八木札の辻

西の平田家付近から横大路（右）と
東の平田家（現在の八木札の辻交流館）を望む



二軒の旅籠

橿原市の近鉄大和八木駅近くに、平城京と藤原京（694～710年）とを南北に結ぶ「下ツ道」と、難波から竹内街道を経て藤原京へと東西に結ぶ「横大路」（東に直進して長谷寺や伊勢神宮につながるため「初瀬街道」や「伊勢街道」とも呼ばれる）が交差する十字路がある。嘉永元（1848）年に版行された「西国三十三所名所図会」でも、その賑わいぶりが描写されている交通の要所「八木札の辻」である。

当時はここに「高札場（こうさつば）」（※）があり、下ツ道を挟んで東と西の両側に、二軒の旅籠があった。

西の平田家（正面）＝橿原市北八木町２丁目

「草臥（くたびれ）て宿かる比や藤の花　はせ越（芭蕉）」
貞享５（1688）年４月11日（旧暦）「笈の小文」
の旅で八木町の宿に一泊した時のもの（橿原市教委）

八木札の辻交流館のパンフレットより「西国三十三所名所図会」
絶え間なく旅人で賑わっていたことを伝えている。

地域の交流館に

その一つである「東の平田家」は、所有者から橿原市が寄贈を受けて改修され、2012年から「八木札の辻交流館」として一般開放されている。反対側の「西の平田家」には現在も人が住んでいる。

改修前の「東の平田家」には、埃まみれの古文書の中に江戸末期から明治初期の宿帳があった。宿帳には、前日と翌日の宿泊場所を書く欄があり、吉野から八木を経て奈良へなど鉄道が無い時代の人達の歩く距離の長さに驚かされる。また、尊王思想が高まった時代を背景に飛鳥の天皇陵を清掃したという人たち記録もあった。

「八木札の辻」周辺は伝統的な町家が多く、この地域一帯に登録有形文化財が４件登録され、奈良県立医大生が古い町家を改修して「町屋ダイニングはる」や「寺塾」を開くなど、歴史的な景観が保たれている。そこには、地元住民らが2005年に設立したNPO法人八木まちづくりネットワークが、八木周辺の歴史や建造物をを歴史的遺産と位置づけ、まちの活性化のために取り組んできた背景があることも見逃せない。「八木札の辻」は、往時の賑わいと、現代のまちづくりが交差する場所でもある。

（取材・文　神野武美）

市指定文化財「東の平田家（旧旅籠）」が、2012年７月より、八木札の辻交流館として開館。
建物の見学は無料。２階を貸室として利用可。１階土間部分には休憩できるベンチとお茶が用意されている。

※高札場＝幕府や領主が決めた法度（はっと）や掟書（おきてがき）などを木の板札に書き、人目のひくように高く掲げておく場所のこと

パネルを使って「非時香果（ときじくのかぐのこのみ）という古代の呼び名と橘の薬効成分について語る城健治会長＝大和郡山市発志院町の事務局で

平城京（奈良市）と藤原京（橿原市や明日香村）を結んだ古代の官道「中ツ道」には、「橘（たちばな）街道」という別名がある。平城京の左京東端（大安寺付近）から南に真っ直ぐ明日香村の橘寺にまで下り、発掘調査によると幅は23 mもあったという。今は一部が県道51号になっているが、道自体は途切れ途切れ。約４年前から市民団体「なら橘プロジェクト推進協議会」（城健治会長）が、この街道沿いなどに、香りの高い日本固有の柑橘類、橘を植える活動を続けている。

橘香る街道の復活を夢見て

「なら橘プロジェクト推進協議会」の挑戦

橘街道（中ツ道）

大和橘の植栽地の「橘街道」の立て看板
＝大和郡山市白土町

黄色い実をたわわに実らせた大和橘の木と現在の「中ツ道」＝大和郡山市白土町
橘街道沿いには大安寺境内や大和郡山市内などに200本を植え、４ヵ所に「橘街道」という看板を立てている。天理市の大和古墳群内の山の辺の道沿いには250本、奈良市尼ヶ辻の垂仁天皇陵そばに150本、追分梅林に500本の計1100本を植えた。

神様へのお供え物になった日本固有の木

プロジェクトのきっかけは約５年前、大和郡山市商工会メンバー10人が「地域を元気にするために何かをしたい」と立ち上げた活動にある。

和菓子老舗の本家菊屋の菊岡洋之さんの「奈良には橘という日本固有の木がある」との発言から、調べてみると、橘の実は神様へのお供え物であり、文化勲章のデザインにもなっていることがわかった。そこで、推進協議会をつくり接ぎ木で苗を増やして植樹する活動を始めた。活動３年目の昨年は約70キロの実を収穫。2016年秋もミカンを小振りにした黄色い実がたわわに実った。

協議会によると、大和橘は非常に香りが高く、古事記や日本書紀では、垂仁天皇の命を受けた田道間守（たじまもり）が常世の国から持ち帰った不老不死の妙薬とされた。万葉集には橘に関する歌が69首もあり、花や葉の香り、霊力、薬効などが日常的に親しまれてきた。しかし、酸っぱくて苦い、種も多いなどの理由から、いつの間にか忘れ去られてしまったという。

夢は橘香る街道の復活

プロジェクト最大の目的は大和橘を奈良発の「商品」にすること。橘には抗酸化作用、抗がん作用などの効能がある成分が多く含まれ、美肌効果もあるという研究もある。果実はお菓子やジャムに、果皮は匂い袋の原料に、種子は植物油（油脂）に、果皮・葉・花はアロマ商品に加工することを目指す。

さらに大和郡山市白土町の橘街道沿いの休耕田や未利用地に約300本を植樹し、初夏（花）から秋（実）まで橘の香りが楽しめる観光拠点にすることを計画している。活動資金は、公益財団法人県地域産業振興センターから３年間の補助金を得たほか、出資すると橘の実を使ったお菓子等がもらえる「大和橘オーナーズクラブ」会員を募っている。

城代表は「橘の自生地は伊豆や志摩半島、四国などにあるが、朝廷と縁の深い奈良で育てるのがふさわしい。昔の中ツ道には橘の並木があったらしい。それの復活ができたらどれだけ素晴らしいことか」と夢を語った。

（取材・文　神野　武美）

市民の手で甦った古道・七曲道

特集連動企画　七曲道あるきレポート

大和郡山市の西部、厄除けで知られる松尾寺の近くに、七曲道という古道があります。難波と大和を結ぶ街道の一部として重要な役割を果たしてきましたが、自動車の普及とともに使われなくなり、いつのまにか廃道同然に。しかし５年ほど前、地元の市民グループがこの道を甦らせようと立ち上がりました。すっかり歩きやすくなった晩秋の七曲道とその周辺を、整備に携わった市民の方々の案内で散策しました。

杵築神社

庚申堂

庚申堂や杵築神社も訪ねながら七曲道へ

11月21日午前9時。ほぼ無風、曇りがちながらときおり陽射しも漏れる、まずまずのハイキング日和です。ＪＲ大和郡山駅に集まったのは、「やまと郡山環境を良くする市民の会」会長の磯三男さん、大和郡山市観光ボランティアガイドクラブ副会長の井渓（いたに）靖子さん、矢田の丘里山支援チームのメンバーで大学生の藤井健太さん、岡村佳樹さん。

まずは井渓さんの案内で、小泉藩の城下町を巡ります。庚申堂は、大和国の庚申信仰の総道場。60日ごとの庚申の日にみんなで夜明かしをして三尸（さんし）の虫を追い払う「庚申講」は、戦後一時途絶えました。しかし10年ほど前から復活し、徹夜こそしないものの、庚申の日には地域の人たちが集まってお参りします。参道沿いの家の軒下には真っ赤な「くくり猿」がぶら下がり、門前市が賑わった往時を偲ばせます。

昨年の「でんでらこ」では、高い木の上の枝先にまで炎が届いたことを説明する鴻巣さん＝杵築神社で

途中で、市民の会の七曲道担当・鴻巣利英（こうのすとしひで）さんが合流し、山田町の杵築神社へ。カシのドングリが絨毯を敷いたように落ちている境内で、保育園児たちが遊んでいます。この神社は山田町の鎮守（土地神）で、秋に行われるお祭り「でんでらこ」は高さ４ｍにも及ぶ大松明が灯されます。また、ヤマタノオロチの首のうち一つがここに埋められたという伝説も伝わります。

結界を意味する「とうげ」

大和小泉駅からほぼ真西へ伸びる県道は、美しい紅葉の里山を従えた田園風景が続き、杵築神社の手前くらいから緩やかな上りとなります。集落を過ぎ、樹影が濃くなり始めたあたりに、小さな広場が。磯さんたちのグループが竹を組んで手作りしたベンチが置かれています。北東方向に視界が開け、晴れた日は若草山から三輪山までが一望できるとか。

「ここは『とうげ』といいます」と鴻巣さん。「でも、まだ上り坂が続いてるから、峠というのはおかしいでしょ。山を登り切ったところという意味ではなく、ここから神域に入るという結界を意味しているんです」。そこで、「手向」という字を当てています。

休憩を終えて再び上り始めると、ほどなくして分かれ道があり、そこに七曲道の案内標識が立っていました。右は県道、左へ入ると七曲道です。両側から雑木が覆う幅１～２ｍほどの急峻な山道が、名前の通り曲がりくねって続き、法隆寺から北上する道と合流して斑鳩町白石畑へと続きます。

自動車の普及とともに忘れられた存在に

古代、この道は海（難波・摂津）から十三峠・平群・白石畑を経て奈良盆地へと至る街道の一部を構成していました。このルート上では、藤原京の瓦を焼いた窯跡・工房跡、大陸形式の側壁がある竪穴住居、船形の埴輪などが発掘されており、磯さんは「渡来人を中心とする古代の工業地帯が形成されていた」と語ります。七曲道は、この工業地帯を支える原料や製品の輸送路でもあったのでしょう。

もちろん、松尾寺へ厄除け参りに訪れる人々の信仰の道でもありました。そして、山田の集落と平群の集落を結ぶ交流の道であり、地元の人々が切り出した薪や堆肥にする落ち葉を運んだり、お墓参りをするために通った生活の道でした。

戦後の高度経済成長期、電気やガスの普及で薪が使われなくなり、県道が通って自動車で往来するようになり、地域のお墓もふもとに移りました。七曲道はいつか、忘れられた存在となっていました。

復活のきっかけをつくったのが鴻巣さんです。定年退職後、山田町の一角に畑を借り、野菜作りを始めました。農業は素人のため、近所の方に教えを請うたりしているうちに、長老とも親しくなり町の歴史などについて聞かせてもらうように。その中で出会ったのが、「昔よく通っていた七曲道が使えんようになって寂しい」という言葉です。彼らが子どものときには、あの険しい道を牛車も往来していたといいます。

「とうげ」にあるベンチと、北東方向に開けた眺め。

すべらないように、階段が作られていた

古代から物と文化を運んで人が歩いた道

七曲道あるき終点の松尾寺の前で

自治会や奈良学園の生徒会有志も協力して復活へ

地域の歴史と文化、そして何よりも人々の暮らしの足跡が幾層にも堆積した由緒ある道を、このまま埋もれさせてしまってはご先祖に申し訳ない。鴻巣さんや磯さんはそんな思いから仲間に声をかけ、２０１２年度から七曲道再生に向けた活動を始めました。まず倒木を除けたり、道の中まで生えてきている木や草を切ったりして、道として機能していなかった３５０ｍほどをとりあえず歩ける道にしました。ところが、雨が降ると濁流が道を寸断し、至るところぬかるみができてすぐ通れなくなってしまいます。

道の入り口にある
手づくり郷土賞受賞の碑

きちんと整備するには、階段をつけたり砂利を敷いたり、滑落防止の杭を打ち込んだりする必要があります。排水のため、Ｕ字溝を道の脇に埋め込むことも不可欠と考えました。こうした作業に使う資材の購入費は市の援助で賄い、人手については地元自治会や近くの奈良学園生徒会有志の協力を得ることができました。

「歩ける道にしたら、次は歩きたくなる道へ」というわけで、２０１３年度からはイロハカエデなどの苗を植樹。また、道沿いの主だった木には樹種を記したネームプレートをつけました。

市民による整備作業は、今も毎月１回行われています。草刈り、倒木の除去、崩れかけた道の修復など、やることはいくらでも出てきます。道は生き物。人が世話をしなければ、すぐ死んでしまいます。さらに近年は、ナラ枯れの拡大という深刻な問題に直面しています。

七曲道あるきの参加者で記念撮影。
ご参加ありがとうございました。

それでも鴻巣さんは、「これまで県道を通って松尾寺に参っていた人が、今は七曲道を毎日通ってくれます」と充実感に満ちた表情。市民の会会長として清掃や巨木調査など広範な取り組みに関わる磯さんは、「七曲道の整備も含め、今の活動をさらに充実させたい」と意欲を見せます。奈良学園ＯＢで、卒業後も作業に参加し続けている藤井さんと岡村さんも、七曲道で得たことは大きいようです。「この活動で地域の方々とつながることの重要性を実感しました」（藤井さん）。「道を整備することで自然が豊かになり、いろんな生物が戻ってきてくれたのがうれしい」（岡村さん）。

七曲道を歩くと、いろんなものを運び伝えもたらしてきた道という存在の大きさを、一歩踏みしめるごとに感じるような気がします。

（取材・文　北井弘）